

# 2025年度 法学部 スポーツ推薦入学試験 小論文問題

| 受験番号 | 氏名 |
|------|----|
| E    |    |

次の文章を読み、解答用紙に解答しなさい。

大会直前、あなたが所属しているチームのメンバーが違法行為をしていたことが判明しました。大会への出場を辞退すべきか否かをめぐって、チーム内では意見が分かれました。

大会に出場すべきか否かについて、「連帯責任」と「個人責任」という言葉を用いて、あなたの見解を論じなさい。

# 2025年度 経済学部

## スポーツ推薦入学試験

小論文 試験問題 (800字以内で解答しなさい)

今日のスポーツ界では、SNSやメディアを介してアスリートが誹謗中傷の標的となる事例が増加しています。このような誹謗中傷は、競技パフォーマンスやアスリートのメンタルヘル스에悪影響を及ぼすだけでなく、スポーツの健全なあり方や社会全体にも深刻な影響をもたらす可能性があります。この問題について、以下の三点について述べてください。

1. アスリートに対する誹謗中傷にはどのような要因と背景がありますか？
2. 誹謗中傷がアスリートのメンタルヘルスを含めた競技生活に与える影響は、どのようなものが考えられますか？
3. 誹謗中傷からアスリートの心身を保護するために、どのような対策ができますか？

※具体的な例をあげ、回答すること。また、対策については、個人で行うものに加え、スポーツ組織、社会としての対応を含めて述べること。

# 2025年度 商学部 スポーツ推薦入学試験

## 小論文 問題用紙

世間では格差社会が問題視されることがあります。他方で、プロ野球などのプロスポーツの世界では、年収の格差が10倍以上となることは珍しくなく、そのことが問題視されることもほとんどありません。格差社会の何が問題なのかについて400字（句読点含む）以内で論じなさい。

2025年度 中央大学理工学部 スポーツ推薦入学試験  
小論文試験問題

実施日 2024年12月2日

1. 学業とスポーツを両立するためにこれまでどのような工夫をしてきたかについて、具体的なエピソードを交えて説明してください。また、中央大学入学後に、理工学部での学びとスポーツの両立を実現する方法について説明してください。
2. あなたが志望する学科で取り扱う学問分野に興味や関心を持った理由をできるだけ具体的に記述してください。また、中央大学理工学部で開講されている講義をあなたが実際に受講し、さらに研究室での研究に加わる経験が、あなたのスポーツ活動にどのように生かされるのか、述べてください。

2025年度 文学部スポーツ推薦入学試験

小論文 出題用紙

問題

以下の設問すべてに答えなさい。

1. 近年スポーツの国際大会などで、他国に武力侵入したことなど政治的な理由によって、特定の国や選手が参加できないことがあります。過去にも政治的理由で選手が参加を拒否されたり、選手が不利益を受けたり、国が選手を送らなかつたりしたことも起りました。あなたはこのような問題についてどう思い、どのように対応することが望ましいと思いますか。過去や現在の具体例を挙げながら述べなさい。
2. スポーツを行うにあたって、試合で勝つことや大会で結果を残すことが最も大切であるという立場、いわゆる勝利至上主義という立場がある。あなたはこの立場について、どのように考えるか。自分の考えを述べよ。

2025 年度 総合政策学部  
スポーツ推薦入学試験 小論文試験問題

次の課題文を読んで、以下の問いに答えなさい。

- 問1 大学のスポーツ界には、どのような問題があると言われていていますか。400字以上で論じなさい。
- 問2 あなたは、その問題をどのように解消すべきだと考えますか。具体例を挙げながら、600字以上で論じなさい。

【課題文】

日本大学アメリカンフットボール部の違法薬物事件をはじめ、大学スポーツ界で不祥事が相次いでいます。その背景には何があり、どうしたら防げるのでしょうか。専門家のインタビューや大学の取り組みとともに、解決策について考えます。

著作権の都合上、掲載不可です。

# 著作権の都合上、掲載不可です。

■過剰なストレスの弊害、対処法学んで 応用神経科学者・青砥瑞人さん

なぜ問題とされる行動を学生アスリートは起こしてしまうのか。脳神経科学を教育などの分野へ応用する研究、コンサルティングを行っている「ダンシング・アインシュタイン」の青砥瑞人代表（38）に聞きました。



多くの要因がからんでいて単純ではないと思いますが、脳の影響も無視できないので、その点から考えてみます。

まず、不祥事を起こしてしまった方々には、多大なストレスがのしかかっていた可能性が高いと思います。過剰なストレスがかかると、脳は心理的危険状態になり、前頭前皮質の機能が働きにくくなってしまいます。感情を抑制し、不適切な行動を抑えるブレーキ役を担う部位です。冷静なときには「やっちゃいけない」とわかっているようなことをしてしまうのは、そのためです。

一方で、ストレス自体は悪いものではありません。私たちが成長させ、パフォーマンスを高めてくれます。特に大学生は、前頭前皮質の成長の最終段階にあります。悩んで、自分で決めて行動することで脳は育まれます。自分自身の人生や成長について葛藤することはウェルカムです。

ポイントは、アスリート一人ひとりが「いい」ストレスに集中できる環境を整えること。そして、「何かあったら支える。だから相談してね」と言ってくれる安心できる存在がおり、ストレスが過剰になっていないか、周りが観察しながら支えていくこと。このようなことが大事になると思います。

一方で、不要な「悪い」ストレスも存在します。体罰、嫌がらせ、第三者によるSNSでの発言などです。脳がこれらを気にすると、「いいストレス」に集中しにくくなります。また、指導者が「こうした方がいい」とトップダウンで繰り返し、アスリートを思考停止にしまうことも、脳の成長にはつながりません。

いまはストレスの仕組みやマネジメントの仕方については、科学的な提言が積み上がっている時代です。専門家にも頼りながら、学ぶことでとらえ方は大きく変わっていきます。体内のストレスとうまく付き合い、脳の成長に生かすことは、結果として不祥事の発生確率を低めることにもつながると思います。チーム・組織も、監督も選手も、しっかり学んで、アップデートし、共通認識として持っていることが重要です。(聞き手・内田快)

■不祥事防ぐために 選手・外部の声を聞き、運営見直し／学業も重視  
運動部の不祥事を防ぐための取り組みも各大学で始まっている。

近畿大の一部の運動部では、2021年から第三者の評価を元に部のあり方を考える「スポーツチームアセスメント」を行って組織作りにつなげている。近大スポーツ振興センターの石崎重之・事務長は「運動部で生じているギャップを目視し、組織を内面から見つめ直すことができる」と話す。

日本スポーツチームアセスメント協会による匿名アンケートが行われ、「練習量は適切か」「パワーハラを見たり、受けたりはしたことは」など、指導者や他の選手との関係性、組織への満足度などについて部員に様々な質問をする。

協会スタッフは練習の様子も視察し、部の強みや弱みを講義の形でフィードバック。言語化されていなかったもやもやが浮かび、部員が感想や改善方法を考えて発言する時間を作る。同協会の菊池教泰・代表理事は「一般企業のように、外部の目線を不祥事の抑止力とし、指導者と学生がともによりよい組織を作ろうと成長する足がかりにしてほしい」と語る。

スポーツ優先で学業が軽視されがちだと指摘されるなか、運動部学生を対象に最低取得単位を定め、学業との両立を重視する大学も増えている。立教大は08年から、アスリート選抜入試の入学者に対して年2回、単位取得状況などを確認し、懸念のある学生をリストアップ。基準を満たさない学生は教員が面談し、改善を促す。

現在、一般入試で入った学生と留年率は変わらないという。同大で体育会を担当する西澤朋泰課長は「アスリート選抜入試の入学者がきちんと単位をとっていることで、一般入試で入った学生の学業への意識醸成にもつながっている」と、取り組みの効果を話す。(平田瑛美、編集委員・中小路徹)

出典：『朝日新聞』2024年2月25日11面

朝日新聞社に無断で転載することを禁じる  
承諾番号25-0196